

## 文化遺産を今に活かす② 国宝・中平銘鉄刀が出土した東大寺山古墳 桑原 久男 Hisao Kuwabara

昨年11月に卒寿を迎えられた天理大学名誉教授・金関恕先生が、遺憾ながら、3月13日に逝去され、ご子息のバイオリニスト、環（たまき）さんが奏でるレクイエムに送られてご家族とお別れされた。環さんのお名前は、天理市櫛本町に所在する東大寺山古墳から出土した鉄刀に装着された青銅製の環頭にちなんでいる。1961～62年、金関先生が現場作業を担当した東大寺山古墳の発掘調査では、被葬者を葬った棺の外側から多量の武器や武具が出土したが、そのなかに、オリジナルの鉄刀を改造して、家形や花形の装飾をした日本列島産の青銅製環頭を取り付けたものが多く含まれていたのだ。とくに有名な中平銘鉄刀は、全長110cmの刀身の棟の部分に金象嵌で24文字の吉祥句を表し、「中平□□（年）五月丙午造作文（支）刀百練清剛上応星宿□□□□（下避不祥）」と読むことができる。銘文の冒頭に刻まれた後漢の年号、「中平」（紀元後184～190年）は、紀年銘資料として国内最古で、古代の倭の国と中国の国際交流の一端を伝える超一級の歴史資料だ。

東大寺山古墳の発掘調査では、大量の武器・武具のほか、「鍬形石」と呼ばれる腕輪型の石製品など数多くの副葬品が埋葬施設から出土した。古墳が築造された年代は、こうした副葬品や植輪の型式によって、古墳時代の前期後半（4世紀後半）と考えられる。古墳出土の副葬品は、発掘調査後しばらくは天理参考館に保管されていたが、その後1968年と1970年に国保有となって東京に運ばれ、1982年に一括で重要文化財に指定された。その後2001年に東京国立博物館（以下、東博）に管理換えとなり、中平銘鉄刀は丁寧な修理作業も施された。2006年、未完になっていた発掘調査報告書の作成をめざし、天理参考館と天理大学の関係者を中心に東大寺山古墳研究会が発足し、総合的な調査研究を開始した。翌2007年には3カ年計画の科学研究費が採択され、天理大学と東博が共同研究の覚え書きを締結し、東博に保管されている出土資料の本格的な調査が始まり、秋には、公開シンポジウム「東アジアの中の東大寺山古墳」を開催した。さらに2008年、東博での遺物調査を継続しつつ、墳丘の測量調査を重点的に行った。こうした調査研究の成果として、2010年、待望の報告書『東大寺山古墳の研究』が刊行され、合わせて、出土遺物の里帰り展「よみがえるヤマトの王墓—東大寺山古墳と謎の鉄刀—」が天理参考館で開催された。

2017年、重要文化財だった東大寺山古墳の出土資料が、一

括で国宝に指定されることになったのは、古墳と出土資料の歴史的・文化的重要性を明らかにした報告書の刊行が評価されたと同時に、中平銘鉄刀など劣化しやすい鉄製品をはじめ、東博に保管・展示されている各種の遺物の綿密な保存・修復の処理がなされ、良好な状態を保っていたことによる。これに対して残念なのは、副葬品などの出土資料が国宝に指定され、東博で大切に扱われて広く見学者に公開されている一方で、それらが出土した東大寺山古墳の現地が、文化財保護法においては、他の一般的な遺跡の場合と同様に、「周知の埋蔵文化財包蔵地」としてしか扱われておらず、史跡指定がされていないことだ。古墳の墳丘は、発掘調査と測量によって、全長130mの前方後円墳であることが確認されたが、現況は民有の竹林となっていて、とくに前方部側は、地権者が細かく分かれ、竹藪が放置されて荒れ放題となり、立ち入れないばかりか、視界も遮られてしまっている。一方、後円部側は竹林の管理が行き届き、古墳が見学できるように整備された通路の登り口に、天理市教育委員会による説明板が設けられている。

最近、街づくり協議会による検討を踏まえた「櫛本校区を中心とした北部地区まちづくり基本構想」（平成29年3月）



写真2 新しく設置されたサインボード

のもと、周遊観光の魅力創出の一環として、「伝・山の辺の道」のルート整備がはかられ、天理教大法教会の敷地に入る手前に、デザインを凝らしたルートガイド（道標）が設置された。道標に東大寺山古墳の方向が示されたのは、これまで古墳の場所が訪問者にわかりにくかった状況が改善されたことと評価できる。ただ問題なのは、道標の案内に沿って、小高くなった丘陵上に位置する東大寺山古墳を見学するには、大法教会の敷地内を通らなければならない、それ以外のルートが存在しないことだ。同じ丘陵上のすぐ南側には、和爾下神社古墳（古墳時代中期初頭）とともに、国指定の史跡公園として天理市が整備を行った赤土山古墳が位置している。「伝・山の辺の道」の活性化、周遊観光のルート開発のために作成された「<sup>いちたび</sup>櫛旅マップ」では、東大寺山古墳、赤土山古墳のほか、東大寺山古墳のすぐ北側に奈良県が県営公園として遺跡の整備を行った櫛本高塚公園も示されているが、これらの行き来をすることができない。同じ一つの小さな丘陵上にありながら、貴重な地域資源と言える各スポットの間の行き来が全くできない現状は残念と言うしかない。多くの課題があり実現には時間がかかるかもしれないが、丘陵上を一体的に整備する、あるいは、少なくとも行き来ができるよう、スポット間をつなぐ散策路を整備することが不可欠で、櫛本地区に所在する類まれな地域資源を活用し、さらなる周遊観光の促進をはかるため、まずは、将来的な構想を描くところから始めなければならない。



写真1 古墳の説明板（背後の丘陵上が古墳）